特別講演①

飛騨の庶民・農民の生活史から得られたもの

——往還寺過去帳の研究

須田圭三

〈歴史人口について〉

社会、経済の変動や歴史の発展を論ずる場合、社会あるいは国家の主体が人間の集団即ち人口である限り、人口に関する研究は極めて重要である。人口に関する統計は原始的な形では古くからあり、古代ローマでは戸口の調査が、わが国では奈良時代の戸籍などの記録がある。しかし人口統計が学問的な研究の対象となりはじめたのは、ジョン・グラウント John Graunt（一六二〇～一六七四）、ウィリアム・ペティ William Petty（一六二三～一六八七）、ジュース・ミルヒ Juss Milch（一七〇七～一七六七）を嚆矢とする。当時は中央集権国家成立の初期で、兵力、労働力、納税人口を増す必要上人口増加が歓迎され、そのため統計学の中心は人口統計の分析であった。この時代の人口統計研究の基礎となったのは教会教区における個人の出生、洗礼、結婚、死亡あるいは埋葬などの記録であった。その後、人口動態統計は次第に発達し、人口調査も十八世紀から十九世紀にかけて欧米諸国で相次いで実施された。わが国でも享保年間（一七二〇年代）から六年毎に所謂「子午造籍」として、皇室、公家、武士を除く農、工、商についての全国人口調査が公の制度として実施された。かくて人口統計学はようやく整備され発展してきた。しかし、人口研究全体の実情としては、十九世紀

前半の信頼すべき資料は極めて乏しく、その大部分は近代的人口統計機構の整いはじめた十九世紀後半以後のものに限られている。

さて、昔時ある一定地域に於てどの位の人口があり、出生、結婚、死亡等の状況はどうであったか、即ち歴史人口の衛生統計については、人口学史、社会経済学史、衛生学史などの専門家による、オリジナルな地方資料に基づく累積的、実証的研究のかたちで行なわれてきている。少なくとも一九五〇～一九六〇年代は、人口史研究基礎資料（地方資料）の収集、整理、並びに統計資料の人口学的評価と基本的分析を行なう初期的段階にあったといえる。

日本民族衛生学会では地域公衆衛生活動を前進せしめるには、地域の健康度の歴史的諸特性の把握が前提条件を成すものであり、かつ今日、地域保健分野から強く要請される事項であるとの観点から、研究展開の方途として過去帳、宗門改帳、家系図などの古記録を計量的、質的に分析することにより、その活用が可能である点に着目し昭和三十三年以来、数多くの研究を積み上げてきた。さらに昭和四十年には「過去帳研究委員会」（委員長安部弘毅）が結成され、方法論の統一と研究作業上の意志統一を図った。同時に肝心の資料となる前記の古記録類は戦後急速に散逸消滅する傾向にあることから、全国的規模による強力な収集記録が緊急の要であるとして、丸山博（大阪大医）、西川滇八（日本大医）、椿宏治（順天堂大医）、諸岡妙子（東京女医大）、辻義人（福島医大）、柳沢文徳（東京医歯大）、安部弘毅（久留米大医）、渡辺定（成城大）、永田捷一（岐阜大医）等は、調査地区を分担し、種々の困難に耐えて資料の発掘と記録を行ない、数々の貴重な報告を行なっている。また、平田欽逸は「過去帳からみた昔人の寿命」（昭和三十八）を発表、岐阜県全地域から二五一カ寺の過去帳を調査して膨大な報告を行なった。日本大学文理学部の菊池万雄は独自の立場で「回向院過去帳」（昭和四十五）を発表している。一方、上記アカディミックなものではなく地方の医師の地道な研究も行なわれた。仙台市の青木大輔は全く独自の立場から「寺院の過去帳からみた岩手県の飢饉」（昭和四十二）を発表している。しかしながら、何処の寺院でも過去に災害、水害、虫害等の種々の厄災に遭っているため、連続二世紀にわたる資料は極めて少なく、また、

資料記載の年間人員数も一〇〇名に及ぶ資料は極めて少ない。

〈往還寺過去帳について〉

演者は牛蒡種研究がほぼ一段落した時点（昭和四十四）で、迷信研究当時飛騨各寺院の歴史を調査した折り、高山市に隣接する宮村の往還寺（檀家戸数約七〇〇戸）過去帳には「首を縊って死んだ」とか「生前お酒飲みだった」とか珍しい記事があると聞いていたので往還寺に出向き拝見させていただいた。同寺院の創建は約五〇〇年前で、過去帳には元禄元年（一六八八）から明和七年（一七七〇）の間は記録は次第と充実、当初の死亡者数は二十名程度であるが年毎増加し、所々に死因も記載されてはいるが、尚統計的資料としては欠けるところが多い。しかし明和八年（一七七一）からの記録は研究時点に至る二六〇年間連続して、死亡年月日、死亡年齢（数え年）、性別についても殆ど記載されてあり、また年間死亡数は、年毎一〇〇名～一五〇名（天保八年の飢饉時には三七五名）を数え統計的にも信頼しうる数値である。過去帳記載の物故者数は調査時点までに二三、〇一七名を数える。特筆すべきものを挙げると

(1) 通常の過去帳にみられる俗名、戒名、死亡年月日の他、死亡年齢、死因、当時のトピック・ニュース等が記載されていることである。死亡年月日と死亡年齢が判明すれば、その人の生存の軌跡が判明し、個人、個人のそれを集積すれば連続的に檀家の歴史人口の算出が可能である。

(2) 明和八年（一七七一）より死因病名が記載され、特に天保二年（一八三一）から嘉永五年（一八五二）までの二十一年間はほぼ全員に死因が記載されて死因調査が可能であり、嘉永五年以後は死因病名としては記載されなくなるが自殺、事故、戦死等については記載されているので、これらに関しては大略明和八年からの死因統計を調査することが出来る。

〈歴史人口、衛生統計の算出法〉

歴史人口の算出には先ず研究時点一九七〇年の檀家の年齢別人口を実態調査し、過去帳記録により、一九六九年から

遡って年毎の死亡数、死産数、年齢別死亡数を調査した。さすれば一九六九年の人口については、一九七〇年の一歳児は出生していないから除外する。二歳児以上のものはそれぞれ一歳年下の年齢である。また一九六九年の死亡者は同年一月一日には一応生存していた訳である。従って一九七〇年度の二歳以上の各年齢別人口については夫々一歳少ない年齢として、それに一九六九年度の死亡者についての夫々年齢別に前年度のそれに加算すれば一九六九年の年齢別人口が判明する。一歳児は出生数に当たる。かくて年次を順次、遡れば、年次毎の年齢別人口が算出出来る。既に年次毎の年齢別死亡数、死産数が判明しているから必然的に出生率、死亡率、年齢別、年齢階層別死亡率、平均余命等々を算出出来る。

〈死因統計、その他解明し得たこと〉

死因病名については江戸後期の古医方により記載してある。従って現在の病名とは直ちに比較は出来ないが、自殺、事故については昔も現在も変わりなく、癲、かさ、はそのまま受けてよい。疱瘡、傷寒、痢病、麻疹は急性伝染病と考えてよい。また、水子は流産と解され、死産は「死んで生まる」「胎死」と記載してあり、一方半身病、卒中、中風も解釈は可能である。これら病名は一〇八種類を数えるが、大方は判断可能であった。かくて死因統計も解明出来た。

この研究で歴史人口の他、人口増加期に於ての産児制限、育児制限と考えられる水子、間引の実態、両者の相関関係、丙午迷信が出生率に与えた影響とその由来の追求、天保飢饉の惨状、伝染病特に疱瘡による死亡の実態についても詳細に報告し、その後は補足的に受胎現象の周期的変動、往時の私生児、双生児の動向、神が人間に与えた寿命等の研究を行なった。特に寿命の問題については十数年を経た現在、東京都老人総合研究所（松崎俊久）の見解とほぼ一致していることを喜んでいる。その後一時病臥の為、研究は中断したが、回復後は国道四十一号線沿いの主な市町村寺院過去帳を調査し、飢饉の折りには、何れの寺院でも死亡者は同年、同月に増加しているが、疱瘡の折りは地域毎に差があることに着目して、飛騨に於ける疱瘡伝染の概況を報告することが出来た。

以上過去帳研究の大綱を述べたが、長期間にわたり死亡年齢と死因が記載されていたことにより、十八世紀後半からの正確な歴史人口を算出以来、死因統計に大きく寄与出来たことに意義があったと考えている。

（岐阜県・須田病院）